

！授業のヒント

今回の対談とこれまでのご実践をもとに、青山先生が挙げてくださった「随筆を書く」授業での手立ての工夫を、四つのプロセスに分けてご紹介します。

1 題材を決める

「どんなことでもいいから、自分の生活の中から題材を探して書きなさい」というのも一つの方法です。しかし、なかには、書きたいことがなかなか決まらず、題材選びに時間がかかる子どももいることでしょう。こちらでテーマを決めてから取り組ませるようにすると、随筆を書くときに大切にしたい「自分を見つめ直す」「出来事を対象化して見る」ことに重点を置くことができます。幾つかの例をご紹介します。

「たのしみは」

教科書教材「たのしみは」（六年P78）を活用し、「自分が『たのしみ』を感じるとき」というテーマで、その理由とエピソードを詳しく書くようにすれば、随筆を書くことにつながられます。

「季節の言葉」

教科書教材「季節の言葉」で季節感を味わった後、「私がその季節を感じるとき」というテーマで随筆を書かせます。「自分にとつての思い出の夏は……」など、低学年での「夏見つけ」とは少し違った、「イメージとしてのその季節」を取り上げる子も出てきます。

『枕草子』の「ものづかし」

「ものづかし」の段からテーマをとります。「清少納言らしさ」がよりくつきり見える段なので、「自分だったら」と、題材を見つけてやすいと思います。「うつくしきもの」「にくきもの」など、幾つかの段を読ませたり読み聞かせたりし、そこから選んで書かせます。

腹立たしきもの

夜にねようとすると、自分の使っている枕に弟の足が乗っているとき。わざわざどこかなければならない上に、持ち上げるとぐずる。早くねたいと思うのに、ぐずられるとても腹立たしい。

また、パソコンや電子辞書で、何度も何度も文字を打ちまちがえてしまうときもかなり腹立たしい。ただでさえ起動に時間がかかるのに、さらに時間がかかってしまい、すごくいらいらする。特に好きなことについて調べているときだと、さらにいらいらする。

▲『枕草子』の「にくきもの」の段からテーマをとって、腹立たしいものについて子どもが書いた短い文章の例。「自分らしさ」がよく表れている。

論語

論語が手がかりとなり、生活の中での出来事とそれについての考えを導き出しやすくなります。

※対談の中でも触れられていますが、実践の詳細は『古典が好きな子になる』（光村図書）に掲載。



2 構想を練る

伝えたい相手とメッセージを
初めに決める

「初め・中・終わり」で構成を考える

3 記述する

書きだしを工夫する

An illustration of an open book with horizontal lines representing text on its pages, and a folded newspaper with a visible masthead and columns of text below it.

逆接の接続詞を使う

◆伝えたい、訴えたいメッセージ

◆伝えたい相手（読み手）

小学校高学年
(筑前)

大江健三郎 風

はじめに結論を言ってしまう。

文体をまねる——「○○」風

司馬風

さくらももこ風

◆ 構成

◇ 序論

◇序論（話題提示・書き出し）

◇本論（具体例などを箇条書きする）

・異体例：二部六年のみんが使っている言葉
が使っている言葉
・以前：電車の中で見た（聞いた）低学年の言葉
・常識内の言葉の例

◇結論（メッセージ・読み手が行動できるように具体的に述べる）

乱暴な言葉は――あまり使わないのが一番良いのだが、**木下**の
 立場に立ち考えて言う、あのたまのようだが、本意に大層なこと
 だと思う。そして下品な言葉もやはり使わないのがベストだが
 常識を考へて、以前青木先生が言っていたように、常識
 内の言葉を選ばなければ、別にいいと思う。

4
交流する

にしておくことが重要ですよ。

生きてきます。

観点を示すようにします。